

【研究論文】

ネパール人日本語学習者の短文作例に現れた
助詞の欠落・誤用の分析
— 「が・を・は」を中心に—

An analysis of missing and misused particles in short sentence compositions
of Nepalese learners of Japanese: focusing on "ga," "wo," and "wa"

キーワード：ネパール人日本語学習者 誤用分析 格助詞 取り立て助詞

田添 暢彦

Nobuhiko TAZOE

1. はじめに

沖縄ではコンビニエンスストアなどで働くネパール人の姿はもはや日常の風景となった。当然ながら日本語学校などで日本語を学ぶネパール人日本語学習者数も増加傾向にある。2021年度の日本学生支援機構による留学生在籍数調査結果¹では、国内のネパール人留学生在籍数は18825人で、これは留学生在籍総数の中で中国、ベトナム人に次いで3番目に多い。

このように国内のネパール人の生活者、日本語学習者が増加の一途をたどっているという現状があるにもかかわらず、ネパール人学習者への日本語教育を支援するための指導方法、教材開発やその基礎となる日本語とネパール語²の対照研究は盛んにおこなわれているとは言いがたい。他の言語使用者に対する日本語教育においては、対象言語学的手法による研究やその日本語教育への応用において既にかんりの蓄積がある。これに比べて、急増するネパール人日本語学習者の学習や指導の参考になりうる研究成果も学習者コーパスのような一次資料も非常に少ない。これまでのネパール人日本語学習者に関する研究は学習環境などをめぐる事例研究がほとんどである（引田 2019b）。嘉手川（2016）が沖縄県内の日本語学校に在籍するネパール人学生の就学状況を報告している他、ネパール人留学希望者の急増の背景を論じたもの（佐藤2012、柳2017）ネパール国内における日本語教育をめぐる状況の調査報告（引田2019b）などがある。しかしながら、日本語の習得そのものに関わる研究は非常に限られており、管見に入ったものは、ネパール人学習者の特殊拍および拗音の知覚と生成を論じた引田（2019a）、ネパール人日本語学習者による日本語のリズム形成を論じた大熊（2018）のみである。引田（2019b）も指摘するように「現状では、ネパール人日本語学習者を対照とした日本語の学習教材のみならず、日本語の習得や誤用に関する研究も行われておらず（中略）ネパール人留学生への対応は日本語学校でも手探りの状態が続いて」といわざるを得ない。

このような状況のなかで、筆者はネパール人学習者への指導法の研究を継続して行っていきたいと考えており、まず、その端緒として本稿では、授業の一環として行ったネパール人日本語学習者の短

文作例に現れた誤用の分析を行った。次章以降、第2章では分析の方法とデータの内容を説明する。第3章では得られた結果を報告する。第4章では得られた結果に対する考察を行う。最後に第5章で今後の課題を挙げる。

2. 分析の方法とデータの概要

筆者は2022年4月から6月に那覇市にある日本語学校で初級クラスの授業を担当し、その中で短文作成練習を行った。本稿はここで得られた短文作例を分析対象とする。本章では、本稿の考察の対象となるデータを産出した学習者の背景、短文課題の内容を紹介し、分析の方法について述べる。

2.1 データの概要

本稿の考察対象とする短文作例を収集した背景について、短文を産出した学生および短文作例課題の実施方法について述べる

2.1.1 学習者の背景

本稿で考察の対象としたデータを収集したクラスは2つある。開講当初、一方のクラス（以下Aクラスとする）に参加した学習者は12名で、出身国別ではネパール出身6名、米国出身2名、マレーシア、フィリピン、ペルー、ベトナム出身各1名であった。もう一方のクラス（以下クラスBとする）の参加者は合計14名で、フィリピン出身の1名以外はすべてネパール出身者であった。クラスA、Bともに学習者は2022年4月15日から6月28日までの1ターム期間中、1日当たり180分（1コマ90分の授業を2コマ）、月曜から金曜の週5日間、合計43日間（129時間）の授業に参加した。学習者はみな母国で『みんなの日本語 初級I第2版 本冊』（以下、「みん日I」とする）を使用した日本語学習歴があった。当該校では通常入学前に「みん日I」第15課までを予習するよう指示しており、自習に加えて現地の日本語学校で学んでから来日する学習者も少なくない。加えて当該タームの新規入学者は渡航前の待機期間が長く、一部の学習者は来日前に第25課までが既習で、なおかつ各文法項目の習得状況もおおむね良好であった。このように開講時点でのレディネスにおいてばらつきがみられたが、ABクラスともに「みん日I」の第1課から学習を開始した。当該校の通常のカリキュラムでは、1タームで「みん日I」の第1課から第20課を学習する。しかし、上述の通り母国での自主学習ですでにかなりの進捗がみられた学生がいたため、開講2週間後にそれぞれの学習の進捗状況により、クラスを再編し、通常第1タームの内容を概ね習得済みであると認められた学習者をクラスBにまとめた。クラスBでは通常第2タームに相当する「みん日I」第21課から25課および『みんなの日本語 初級II（第2版）本冊』第26課から第35課までを学習した。このクラス再編の際に他のクラスA、B以外のクラスに移動した学習者が1名おり、最後までクラスA、Bに参加した学習者は合計18名であった。

2.1.2 短文作成課題の実施要領

学習者は授業の最初の10分程度を使って、教科書で既習の指定されたキーワードを使った短文作成に取り組んだ。短文は事前配布したシートに手書きした。短文作成は全部で30回行った。キーワードとして次の30の表現を各回1つとりあげた。

それから ときどき もう とても あまり たくさん すこし よく ぜんぜん
だけ ぜんぶで ぐらい いちばん ずっと どちらも はじめて ごろ ゆっくり
あとで もうすこし どうやって どの まで までに ぜひ なかなか いちど
いちども だんだん もうすぐ

学習者は、毎回、各自でキーワードを含む1文を作成し、教員は机間巡視を行いながら添削し、コメントを与えた。これを行う目的は、各課終了時に行っている単語テストでは習得が確認しにくい表現（主に副詞）を用いた短文の産出を通して当該項目の理解定着を学習者と教員が確認することである。直近に学習したばかりの語彙を用いた短文作成ではあったものの、教員が予期しないような様々な誤用が認められた。

2.2 分析の方法

本稿で行った分析は、2.1.1に述べた学生が2.1.2の学習活動を行った中で得られた短文作例のうち、ネパール人学習者によるものだけを抽出し、これを分析の対象とした。抽出した短文は全体として約500例あり、その中で誤用を含む文は89例あった。これ以外に本研究のために新たに補足的な調査を行うことはしなかった。また、2.1.2の短文作成は当該クラスにおける通常の学習の一環として行ったものであり、短文作成実施の時点では調査を意図したものではなかった。分析は、日本語の母語話者である筆者が、すべての短文作例に目を通し、各文の適格性を判断し、誤用が認められた場合には、想定される訂正例との比較を行うという方法をとった。³その上で、誤用の特徴をもとに分類し（本稿第3章参照）、これに対する考察を行った（本稿第4章参照）。

3. 分析の結果

2.3で示した方法に基づき誤用の分類を行った結果を以下に示す。まず、対象となる短文例中には、用字上の誤用（30例）が見られたが、これに対する分析は稿を改めることとし、以下本稿では、文法上の誤用を考察対象とする。収集した短文約500文中に文法上の誤用を含む文は79文あった。1文中に複数の誤用が認められるものもあったため、誤用の総数は異なり数で89例であった。表1に誤用の種類に基づく分類を示す。なお、本稿では「本来現れるべき助詞が欠落している」と判定したものを「助詞の欠落」と呼ぶ。また、「本来『助詞A』を用いるべきところで『助詞B』が用いている」

と判断したものを「助詞『A・B』の取り違い」と呼ぶことにする。ここでいう助詞は取り立て助詞と格助詞である。

表1 誤用の種類に基づく分類

誤用の種類	事例数
助詞の欠落	28
助詞の取り違い	22
動詞の活用・接続	17
疑問詞	5
副詞の位置	3
頻度・程度副詞の混同	4
形容詞の活用	1
コロケーション	4
助詞の余剰	1
副詞と形容詞の混同	1
コピュラ動詞	1
分類不能	3
合計	89

表1は誤用の性質が多岐にわたることを示している。その一方で助詞に関わる誤用（欠落・取り違い）が多いという傾向が認められ、これは、ネパール人の日本語学習において格助詞・取り立て助詞の習得に困難が生じていることを示唆している。これを踏まえ、ネパール人日本語学習者による格助詞・取り立て助詞の誤用の分析とその指導への反映を目指し、次章で助詞の欠落・取り違いを本稿の中心的な考察対象と捉えて、検討を行う。

4. 考察

第3章で行った誤用の分類の結果、今回採集した文法上の誤用例の中で、取り立て助詞および格助詞にかかわる誤用がもっとも多く出現したことがわかった（表1）。本章では、格助詞および取り立て助詞にかかわる誤用についてさらに考察を行う。4.1では助詞の欠落例について考察を行い、続く4.2では助詞の取り違いについて考察する。

4.1 助詞の欠落

第3章で格助詞および取り立て助詞が欠落した事例数が誤用例全体の中で最多であったことを受け、本節では助詞の欠落に焦点を当て考察を進める。まず、欠落した助詞の種類と用法に基づいて概略的な分類を表2に示す。

表2 欠落した助詞の分類

欠落した助詞	事例数
は	10
が	6
を (対象)	4
に (時)	1
の (連体修飾)	5
で (場所)	2
合計	28

合計28例のうち、「は」の欠落例が最も多く、10例あった。次に多いのは「が」の欠落で、6例あった。そこで、4.1.1では最も出現例の多かった「は」の欠落について考察を行い、4.1.2では次に多く現れた「が」の欠落について検討する。

4.1.1 「は」の欠落

欠落の中でもっとも顕著であった「は」について考察する。「は」の欠落が起こった例では対応するネパール語文において、後置詞が付加されない傾向がある。「は」の欠落が現れた名詞句を例示する。

- (1) タイ語 (は) ぜんぜん分かりません。
- (2) ひらがな (は) だいたい分かりますが、漢字 (は) あまり分かりません。
- (3) モモ⁴ (は) どうやって作りますか。
- (4) さかな天ぷら (は) どうやって作りますか。

これらに対応するネパール語では日本語の格助詞に相当する後置詞を付与しない。例として、(1) (2) に文意に近いネパール語の例を挙げる。

(5) ma jāpānī bhāsā jāndinā

私 日本語 分からない

‘私は日本語はできません。’ (野津2006:44)

ネパール語では、主語・目的語・動詞の配列は日本語同様にSOV型を基本とし、名詞句に後置詞を付加することによって格標示を行う。ただし、主語・目的語には後置詞を付加しないことが多い。

具体的には、表3に示すように、主語は自動詞文で無標の主格（ゼロ格）を取る。また他動詞文でも過去・完了形の場合を除き、主語は無標の主格である。さらに、直接目的語も多くは無標で、直接目的語が人間の場合のみ後置詞*lai*による格標示が義務的である（石井1992:107-108）。

(6) mero āmā bihāna saberai uṭhnuhuncha, mukh dhunuhuncha

私の 母 朝 はやく 起きる 顔 洗う

‘私の母は朝早く起きて、顔も洗います。’

(6) では、主語「私の母」、目的語「顔」とともに後置詞を取らない。

表3 ネパール語における主語・目的語の格標示

		後置詞			後置詞		
		現在	過去・完了		人	生物	物
主語	自動詞文	なし	なし	直接目的語	lāi	なし または laI	なし
	他動詞文	なし	le				

次に、名詞句に格助詞と「は」が付加される形式での「は」の欠落について考察する。(7)(8)は「は」が格助詞「で」に後続する。(7)(8)ではいずれも「は」は欠落しているものの、その前の格助詞「で」は正しく産出できている。

(7) 季節で (は) 夏がいちばん好きです。

(8) 私は肉で (は) 豚肉がいちばん好きです。

(7)(8)で格助詞「で」を伴う名詞句は、述語によって述べられる判断・評価が及ぶ「範囲」を表す。では、ネパール語で「範囲」を表す表現において、後置詞は現れるのだろうか。次の(9)では行為が実現する時間的な「範囲」を表す表現 pāc minat=mā ‘5分間’では後置詞 mā が現れている。

(9) ma pāc minat=mā āune chu

私 5 分=後置詞 来る コピュラ

‘私は5分間のうちにきます。’ 鳥羽(1980:124)

次の(10)も同様に、「は」は欠落しているものの、場所を表す二格「学校に」までは正しく産出できている。

(10) 学校に (は) たくさん国の友達がいます。

場所表現はネパール語では後置詞を mā をとる。(11)では場所表現 pasār ‘市場’に mā がついている。

(11) ma pasār=mā āp kine

私 市場=後置詞 マンゴー 買った

‘私は市場でマンゴーを買った。’ 鳥羽 (1980:124)

(10) (11) を比較すると、ネパール語で後置詞を使用する場合には日本語の短文作例でも適切に格助詞（場所の「に」）が産出できていることが分かる。

(7) から (11) を通して、「は」の欠落例とこれに対応するネパール語文の比較を行った。「は」の欠落が起こっている名詞句は、対応するネパール語文でも無標であり、反対にネパール語文で後置詞が必要な名詞句は対応する日本語文でも助詞が正しく付与されているといえる。

4.1.2 「が」「を」の欠落

4.1.1 で検討した「は」に次いで欠落が多いのは、主語を標示する格助詞「が」の欠落例で、目的語を標示する「を」合わせると10例になる。「が」「を」は文が成立するために統語上不可欠な名詞項（ここでは森山 (2000:58)⁵ に従い「格成分」と呼ぶ）である。一方、文の成立に不可欠ではない名詞項（ここでは森山 (2000:58)⁶ に従い「余剰成分」と呼ぶ）の欠落例は「時」を標示する「に」2例、「場所」を標示する「で」1例にとどまった。このことから、格助詞の欠落例においては、統語上の格成分を標示する格助詞の欠落が余剰成分を標示する格助詞の欠落に比べて顕著であることがわかった。

ネパール人学習者の産出する日本語文において格成分「が」「を」の欠落が多く見られる背景には、表3に示した通り、母語で主語・目的語で日本語の助詞「が」「を」に相当するような後置詞があまり現れないことが影響している可能性がある。

4.1.3 助詞の欠落のまとめ

本節では、助詞「は」「が」「を」の欠落について、考察を行った。「は」「が」「を」の欠落が生じている名詞句は、対応するネパール語文でも後置詞が不要であり、これはネパール人日本語学習者が日本語産出の際に助詞が欠落する要因の1つと考えられる。一方、対応するネパール語文で後置詞の付与が義務的な(7)(8)(10)では「は」の欠落は生じているものの、格助詞は適切に付与されており、ネパール人学習者が日本語を産出する際に生じる格助詞の欠落の有無と、対応するネパール語文での後置詞の有無との間に対応関係が認められた。

4.2 助詞の取り違え

次に、助詞の取り違えを考察する。助詞Aを用いるべきところで助詞Bを用いた場合、これを仮に「助詞『A・B』の取り違え」と呼ぶ。

前節では「は」の欠落が著しいことを確認したが、取り違いにおいても「は」にかかわるもの（助詞「は・が」の取り違い）が最も多く、5例現れた。（表3）

表4 格助詞の取り違いの分類

誤 → 正	事例数
が → は	5
が → を	1
を → が	3
を → は	1
を → に	2
に → で	2
に → から	1
に → と	1
までに → まで	4
より → から	1
合計	23

「は・が」「は・を」の取り違いの例は以下の通りである。

- (12) 暑い天气があまり好きじゃありません。
- (13) アルバイトがあまり難しくないです。
- (14) 私の両親がずっとネパールにいます。
- (15) もう学校が終わりましたか。
- (16) この服をどこかで買いましたか。

「は」の取り違いが生じる原因はどこにあるのだろうか。本節では文の成立にかかわる規則として名詞句に付与される標識（ここでは統語レベルと呼ぶ）という観点からまず考察を行い（4.1.1）、続いて話者の表現意図を実現するために付与される標識（ここでは談話レベルと呼ぶ）について考察する（4.1.2）

4.2.1 統語レベルでの分析

(12) から (16) は「は」を使用すべきところで「が」、(16) は「を」をそれぞれ使用している。これらの名詞句とそれぞれの述語との関係を見ると、統語レベルでは適切にガ格/ヲ格を付与していることが分かる。

表5 取り違えが生じた名詞句と述語の関係

	名詞句	述語（辞書形）
(12)	暑い天气が	好きだ
(13)	アルバイトが	難しい
(14)	私の両親が	いる
(15)	学校が	終わる
(16)	この服を	買う

4.2.2 談話レベルでの分析

次に、(12) から (16) を談話レベルで見ると、文頭にある名詞句を主題として提示し、これについて述べ立てているため、これらの名詞句は主題を取り立てる助詞「は」を付与する必要がある。

正しい文では「が」/「を」と「は」には共起制限があるため「がは」/「をは」とはならず「が」/「を」が消えて「は」のみが表出する。しかし、誤用例では4.1.1で見たように統語レベルで名詞句に対してふさわしい格標示「が」「を」を与えることはできているが、談話レベルで主題となる名詞句に「は」を付与し、「が」「を」を表出させないという操作で誤りが生じている。

以上、(12) から (16) に見られる「は」の誤用を統語と談話の2つのレベルに分けて考えることで、誤用の所在が明確になった。すなわち、統語レベルにおいては、正しい格助詞の選択ができているが、談話レベルで主題の「は」の選択ができていないものと考えられる。

4.3 助詞の取り違えのまとめ

(12) から (16) に対して行った分析をまとめる。(12) から (16) では、統語規則に従って、意味上の主語/目的語に対し適切な格助詞を付与することには成功している。ただし、談話レベルにおいて主題化の「は」が適切に使用できなかった。これは統語規則の習得に比べて、談話レベルで機能する取り立て助詞「は」の習得の方がより困難であるということを示唆しており、また、これは統語と談話という異なる言語部門の接点に誤用が生じているとも言える。⁷

5. 結論と課題

本稿では、初級クラスに参加したネパール人日本語学習者が産出した短文作例を資料とし、この中に現れた誤用例をもとに、ネパール人日本語学習者が間違いやすい格助詞および取り立て助詞について考察を行った。

資料とした短文作例の中では、格助詞および取り立て助詞の欠落・取り違えが多く認められ、とりわけ主語、目的語を標示する「が」「を」、取り立て助詞「は」の欠落・取り違えが多かった。

今回は非常に限られたデータを用いた極めて限定的な分析を行うにとどまらざるを得なかったが、今後は日本語とネパール語の格標示および取り立て表現との対照も視野に入れながら、ネパール人日

本語学習者に対する指導において生じる問題点の全体像を捉えることを継続的な課題とし、ここで得られた知見をもとに効果的な指導法を確立していきたい。

【注】

1. 日本学生支援機構:2021 (令和3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果 <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2021.html>
2. ネパール語はインド・ヨーロッパ語族インド・アーリア語派に帰属し、ネパール連邦民主共和国の公用語であるほか、インドのダージリン、西ベンガル、シッキム、アッサム、さらにブータン南部にもかなりの母語話者がいる (石井1992:27)。正書法ではデーヴァナーガリー文字を用いる。音声・音韻論的特徴としては、他の南アジア諸言語同様、子音に有声/無声音、有気/無気音の対立があり、そり舌音を持つ。母音は長・短母音の音韻上の対立を持たない。名詞句においてその構成要素は (指示代名詞) + (数詞) + (助数詞) + (形容詞句) + (名詞) の順になり、日本語に類似している。動詞は接辞によって人称や時制による変化形を派生する。語順はSOVを基本とする。名詞の格は後置詞の付加によって表示する。統語的特徴としてヒンディー語などと同様、過去・完了体に能格が現れる分裂能格性を有する。
3. ただし、文意が不明で訂正例を提示できなかったものが3例あった。
4. ネパール風餃子
5. 「動詞には、その事態が成立するために情報として最低限必要な名詞がある。これを「格成分 (中略) という」 (森山2000:58)
6. 「それがなくても最低限の事態が成立するという成分を「余剰成分」と呼ぶ。(森山2000:58)
7. 異なる言語領域の接点に第二言語習得上の困難が残ることはSorace and Filiaci (2006) にも報告されている。

【参考文献】

- 石井溥 (1986) 『基礎ネパール語』 大学書林 東京
- 石井溥 (1992) 「ネパール語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第3巻 世界言語編 (下-1)』 Pp. 27-33 三省堂 東京
- 石井溥編 (1992) 『ネパール語研修テキスト1 ネパール語文法・練習』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 東京
- 大熊 伊宗 (2018) 「ネパール人日本語学習者による日本語のリズム生成」 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文
- 嘉手川 隼 (2016) 「沖縄県内の日本語学校におけるネパール人学習者の現状と特徴について：日本語学校の事例を中心に」『地域文化論叢17』 Pp.37-60 沖縄国際大学大学院地域文化研究科

- 佐藤由利子 (2012) 「ネパール人日本留学生の特徴と増加要因の分析—送出し圧力が高い国に対する留学生政策についての示唆—」『留学生教育』No. 17 Pp. 19-28 留学生教育学会
- スリーエーネットワーク編 (1998) 『みんなの日本語 初級I 第2版』スリーエーネットワーク東京
- 鳥羽季義 (1980) 『ネパール語基礎 1500 語』大学書林 東京野津治仁 (2006) 『CD エクスプレス ネパール語』白水社 東京
- 引田 梨菜 (2019a) 「ネパール人日本語学習者に対する知覚実験：長音・促音・拗音に着目して」『専修国文 105』 Pp. 43-60 専修大学国語国文学会
- 引田 梨菜 (2019b) 「ネパールにおける日本語教育の実態—聞き取り調査を通して—」『日本語教育研究』 65 巻 Pp. 210-228 長沼言語文化研究所
- 柳基憲 (2017) 「ネパール人留学生の実態に関する研究—福岡で学ぶ留学生を対象として—」『都市政策研究 (18)』 Pp. 113-125 福岡アジア都市研究所
- Sorace, Antonella and Francesca Filiaci (2006) Anaphora resolution in near-native speakers of Italian. *Second Language Research* 22: 339-365.
- 森山卓郎 (2000) 『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房 東京
- 日本学生支援機構 (2022) 「2021 (令和3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2021.html> 最終閲覧 2022 年 6 月 30 日

**An analysis of missing and misused particles in short sentence compositions
of Nepalese learners of Japanese: focusing on "ga," "wo," and "wa"**

Nobuhiko TAZOE

Abstract

In this paper, we examine the case and topic marking particles that Nepalese learners of Japanese are prone to make mistakes with, based on examples of misuse of these particles in short sentences produced by Nepalese learners of Japanese who participated in a beginner's class.

In the examples of short sentences, many case and topic markers were found to be missing or misplaced, especially "ga" and "wo," which indicate subject and object, and the topic marker "wa" were frequently missing or misplaced.